

## 三重の畜産環境美化コンクール審査講評

審査委員長

三重大学生物資源学部 脇田 正彰

わが国近代の畜産は、明治時代に始まり、戦後の家畜改良技術の発展とともに、高度経済成長期における畜産物の需要の急激な増加や飽食の時代を経験した後、品質や健康志向に目を向ける時代となり現在に至っています。

ここへ至る過程において、畜産物を始めとする食料の自給率低下は大きな問題であり、これに如何に対処していくかという命題が与えられているところです。輸入飼料に大きく依存しながら効率的な農畜産物生産を行ってきましたが、これからは資源を有効利用できるように工夫された農畜産業が求められてきているところです。

このような農業の課題もありますが、わが国の畜産が直面する課題としては、日本とオーストラリアの貿易交渉等の国際的な問題も見られます。自由貿易協定（FTA）の結果は、国内の農畜産業の根幹を揺るがしかねないと憂慮せざるを得ない大きな関心事になっています。

生産原価の格差は2倍から4倍とも言われ、もはや合理化や単なる努力だけで埋められる差ではありません。

このような時期にさらに飼料価格の高騰も追い討ちをかけてきています。これまでも短期的にはアメリカの干ばつや世界各地の異常気象による穀物生産量の低下が、わが国の飼料価格を大きく変動させることはたびたびありましたが、この度の問題は、中・長期的な問題として、これまで以上に深刻な事態を招くことも懸念されています。

隣国では中国の、そして地球規模から見ればブラジルやロシアなどの畜産業の発展による飼料需要の増大もその原因のひとつであります。

また、バイオ燃料の製造のための需要増大でさらに、飼料の安定供給に暗雲が立ち始めている状況にあります。

このような状況の中で健全な畜産経営を営み、維持拡大を図っていく畜産経営者の皆さんの努力はまさに賞賛に値するものであります。

生産効率を高め、良質な農畜産物を生産し安定供給することを基本として、今後は、さらに地球の資源に目を転じ、自然と協調した環境の中で資源循環型社会の一翼を担うことを求められているのが、これからの農業であり畜産でもあります。

さて、今回開催の運びとなりました『畜産環境美化コンクール』では、平成16年11月に完全施行されました、『家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律』もさることながら、一般からの注目度も高まったと思われる畜産環境保全に当たり、畜産施設周辺環境の環境保全や美化に対し、各経営で創意工夫されている事例を推薦・表彰し、広く紹介することにより活力ある畜産の育成を図ろうとするものです。

参加資格、審査の基準等の詳細については、その説明を資料に譲りますが、私ども審

査委員がこれらに基づいて選定した結果をここでご報告申し上げます。

なお、このコンテスト実施に当たっては、畜産協会が主となり関係機関に事例の推薦を求めておりましたが、積極的、自主的に手を挙げた事例は少なく、このために畜産協会が独自に調査取りまとめを行ったものを審査の対象といたしました。

また、今回審査対象としたものには、既に全国規模の表彰事例となったり、他の同様の表彰事業で栄誉を授けられたものは、敢えて対象からはずしたことも申し添えます。

このことは、このコンクールの表彰事例は、決して遥か彼方の事例ではなく、努力とそれぞれの創意工夫、そして何よりも経営者の意識の持ち方を学べば、手の届く範囲にあるということ、生産者の皆さんを始め、関係者の皆さんに認識していただきたいと思ったからであります。

さて、「開催計画」の中には、表彰の種類として、最優秀賞、優秀賞、特別賞を設けてありますが、今回の表彰は、優秀賞に松阪市で採卵鶏経営を営まれる「山下鶏園」を選定し、褒賞を授与することといたしました。

選定に当たり最終的に候補とした事例は、意識したものではありませんが、酪農、肉用牛、養豚、採卵鶏の各1事例ということになりました。

畜種が異なり、規模が異なり、さらに地域の条件も異なる中から、特異な1事例を選定することは、実は容易なことではありません。

それぞれの堆肥化の手法や出来上がった良質堆肥の販売や利用面といった環境保全の取り組みと農村景観という見た目の美しさや、安らぎを与えるものであるか否かといった面も選定には考慮いたしました。

それぞれの事例は、それぞれの経営条件を活かし、これまでの取り組みを基礎として創意工夫がされたものばかりだと判断し、それぞれに賞を授与する必要もあるという判断と同時に、同じ畜種同士での有意な比較ができないということから、今回の授賞事例を1事例に限定させていただきました。

この事例は、成鶏 24,000 羽を飼育する採卵経営で、松阪市の農村地域にあります。農村地域と言うものの鶏舎から最も近い距離では 200m から 300m の位置に新興住宅が建ってきている団地に対峙しています。こういった環境にあるために、ひと時も環境保全対策をおろそかにできない環境であるとも言えます。

優秀賞の対象となった事例取り組み内容は、別途報告されることになっておりますので、細部にまでは触れませんが、次のような点を高く評価させていただきました。

まず第1点は、高床式鶏舎の特徴を活かした無駄のない鶏糞処理の手法です。平成5年に導入した縦型コンポストで鶏糞を発酵処理させることを基本にして良質な堆肥を生産しています。生産された堆肥は、15kg 入りの袋詰めの製品としてJAを通して販売されるとともに、近在の人々には花壇の肥料としても販売し、販売することによって堆肥の良さを伝えており、相互の理解が成り立っているという点であります。生産とともに意義のある販売がなされている点を、まず評価いたしました。

第2点は、季節毎に鶏舎敷地を美しく飾る花の存在に注目をしました。

花が好きな奥様の手により甲斐甲斐しく手入れをされたフラワーポットが場内のこ

こかしこに置かれ、来場する者の目に安らぎを与えてくれています。鶏舎敷地前の道路は、幹線ではありませんが地元の人々が頻繁に通行する道です。その道に面した一角は、年中花を絶やさないと特に気をつけているのだそうです。鶏舎や敷地を美しくすることは、イメージアップだけのためではありません。自分たちの職場が「気持ちよく、楽しく」働ける場であるということも大切であると感じているからです。楽しく気持ちよくといった面では、GPセンターの壁面やシャッターに描かれた家族のイラストもひとつのシンボルかも知れません。また、キレイに整理整頓された場内には、使い古された機材が散乱するようなようすなど微塵もないことも日頃の小さな行動の積み重ねの結果だと受け止めました。

第3点は食品の安全性の問題に対して、定期的なサルモネラ検査や水質検査などHACCP方式により実施されております。

その他にも、なるほどと頷きたくなるような成果がこかしこに感じられる経営であると思えば頭の下がる思いです。

以上のような環境美化に対する意識を持って経営に臨む経営者の姿勢を高く評価させていただきました。

これらの特徴と申しましょうか評価対象は、先ほども触れましたが決して他の事例で取り組むことが困難とか、手の届かないような取り組みではありません。

これを手本として自分の経営でも実践していこうと思えば実行可能で、この経営に近づることができる内容です。いわば今回の選定結果は「超エリート的」なものではなく、「庶民的なエリート」として、優秀賞を授けるものであります。